令和元年度　横浜市世界を目指す若者応援事業

（個人留学による帰国報告）

●氏名

O.Sa さん

●留学先

国/都市：ベルギー/シャルルロワ

外国の高校：Centre Scolaire Saint-Joseph-Notre-Dame Jumet
Institut Sainte Marie

●留学期間

2019 年８月 28 日～2020 年5月１８日

●留学先での活動、留学で学んだこと

私のベルギー留学は、想定外なことが多く大冒険の8か月半でした。

現地での留学生活は主に二つのホストファミリーや学校の友達・先生に囲まれて過ごしました。7 歳のホストシスターは毎日のように私の部屋に来て、一緒にゲームをしたり歌を歌ったり絵を描いたりして賑やかに過ごしました。またホストママは日本が大好きで、日本の話で盛り上がったり、私が作った日本食を「レストランにきた気分」と言って喜んで食べてくれました。夕飯後に学校の話や自身についての話をする機会が多く、ホストママは私の拙いフランス語を笑顔で受け止めて聞いてくれて、私はその時間が大好きでした。

一方学校では、一週間に一度個別のフランス語の授業があり、私のレベルに合わせて先生が指導してくださって、フランス語だけでなくベルギーの文化も教えてくださいました。私はその授業が大好きで、毎週火曜日はわくわくしていました。またボディーランゲージの授業はただ曲に合わせて踊るだけという一風変わったおもしろい授業でしたが、この授業のおかげでクラスにも溶け込むことができ、クラスメイトとも仲良くなることができました。学校の友達は、授業の時に隣に座ってノートを見せてくれたり、休み時間は「Sayaka～」とたくさん話しかけてくれたりして優しい人たちに囲まれて過ごしていました。そして、休日は友達と出かけたりして充実した留学生活を送りました。

私が留学生活を過ごしたベルギーは、国内に公用語がフランス語、オランダ語ドイツ語の３言語存在する多言語国家でした。そして私はそこでフランス語を学んでいました。ゼロから始まった私のフランス語は、当初は自分の意志を相手に分かってもらえないことが多く、言葉の壁に何度も衝突しました。しかし、ホストファミリーや学校の友達・先生が

親切に丁寧に教えてくださったおかげで私のフランス語は成長していきました。最初は言葉という表面的なものだけでしたが、心という内面的なものが加わってからは相手の言いたいことが理解できるようになり、フランス語を話すことが、人と話すことが楽しくなりました。まさにこれは心が通じ合った瞬間であり、母国語以外でこの現象を体験することができてとても感動しました。私のフランス語はまだまだパーフェクトではありませんが、それが生きている言葉であるのは確かで、単語一つ一つには思い出が含まれていて、今でもフランス語を話す度に当時のエピソードやその言葉を教えてくれた人のことを思い出し、懐かしい気持ちになります。

私は8か月半の留学生活を経て、大きく二つのことを学びました。一つ目は、「素直」の大切さです。以前の私はこだわりが強く、他者からの提案やアドバイスに対しても、勝手に取捨選択をして必要のないものはシャットアウトしていました。しかし現地では目の前で起こる一つ一つのことについていくだけで精一杯で、例え自分が興味のないことであっても一度は素直に受け入れて挑戦するようにしました。するとそこから今まで気づくことができなかった新たな発見があり、自分の可能性が、世界が一気に広がりました。そして「素直になる」という単純な行動の重要性に気づき、私はこれからの人生を「素直」に生きたいなと思いました。

二つ目は、「当たり前」など存在しないことです。日本にいる間は、自分を理解してくれる人や自分を認めてくれる人の存在は、私にとって当たり前なことでしたが、日本を離れてみて今までの環境がどれほど便利で恵まれていたかに気づくことができました。私の留学生活はその環境を作るところから始まり、人間関係を築くのに人一倍時間がかかる私は人間関係構築の難しさを痛感しました。しかしいま振り返るとその過程が充実していてそこから得られるものも数多くあり、結果として最高のパートナー（Natalia）と出会うことができました。彼女は芯を持っていて強く、思いやりがありとても愛情深い人で私は彼女を大尊敬しています。そして私も彼女のような素敵な人になりたいです。

私の留学での経験は、楽しかった経験も辛かった経験も含め、すべてが宝物です。まだはっきりとした夢は決まっていませんが、5年後、10年後の自分の姿の原点がこの留学であるように今回の経験をこれから最大限に活かしていきたいです。そして、たくさんの人から色をもらって自分の人生をよりカラフルにして生きていきたいです。